

A woman with dark hair in a ponytail, wearing a white button-down shirt and a dark patterned skirt, is smiling and looking to her left. She is standing in what appears to be a shop or a display area with shelves of various items in the background. The lighting is warm and soft.

矢口加奈子

JOSHIBI no.184



継続の先に

あるものを求めて。

「切り紙」を選んだ理由は覚えていない。そもそも「絶対に作家になる」という高い目標を掲げての船出ですらなかった。「創作を続ける」という創り手として最も大切な強みを手に、独自のポジションを歩んできた作家、矢口加奈子さんの足どりに迫ります。

Photo 本多康司 Text 立古和智

中

学から大学まで、ずっと女子美でした。だから友だちは女子美の人ばかり。彼女らとは一生ものの仲です。すごくユニークな子も多いし、気が置けない間柄のせいかシビアなことを直球で言ってくれる子もいます。いろんな友人がいますがみんな愛すべき宝物です。大学時代は、建築家だった父の影響で、空間デザインを専攻しました。しかし3年次からは個人的な創作活動として切り紙に手を伸ばします。なぜ切り紙だったのか。正直まったく記憶がありません。ただ、他の人と同じでは抜きん出るのには難しいと思った覚えがあります。切り紙って誰もがやることがある行為なのに、それで作家活動をしている人となると当時は見当たりませんでしたから。とはいってみたいものの当時は「作家になる」と意気込んでいたわけではありません。単に好きで続けていただけです。私たちの学生時代って就職氷河期だったんですよね。決して褒められた話ではありませんが、私は就職活動に挑戦することすらなく、最初から「自分で作ったものを

売って、生活費を得よう」と決めていました。今思えばそれは作家活動への第一歩だったのに、この段階でも「作家になる」という意志は希薄でした。学生時代から続けてきた「作っているんな場所を発表する」をもう少し続けてみたかったのでしょうか。当時は今とは違って重点は「切り紙」ではなく「プロダクト」や「グッズ」にありました。肩書きも「クラフト作家」でした。これが「切り紙作家」に変わったのは地味な変化のようですが大きなターニングポイント。24か25の頃のことです。たしかに私が一番やりたかったことは「切り紙のグッズ展開」ではなく「切り紙自体」でした。だからこそ「それを活動のメインに据えた肩書きに」と、周囲からも強く薦められたのです。折った紙にハサミを入れて、広げると、思いも寄らぬ形に巡り会える。今でもそんな切り紙の醍醐味を味わっています。もちろん続けていけば徐々に新鮮さは薄れていきますし、自らに課せられるハードルは上がっていきます。切り紙に限らず、絵でもガラス細工でもデザインでも同じですよ？率直にいつ

て「どれだけやっても飽きない」とまでは言いません。人間ですから「飽きたなあ」って感じることもあって日常茶飯事です(笑)。けれどこの分野には先人がいない分、自分でフィールドを切り拓いていける楽しみがあります。軸は「切り紙」にあるものの「どんなメディアに展開するか」の部分で新たなチャレンジをしたっていいでしょう。やれることは、まだまだあるはずですよ。20代の頃は「なんとか生計を立てなきゃ!」という気持ちで一杯でしたが、続けるうちに今さら辞めるわけにもいかない状況になり、30歳で迎えた転機こそが私の人生を大きく変えます。切り紙に関する本を出させてもらったのです。これを境に、以前とは比べものにならないほど世の中で認知され、たくさんの方がかかってくるようになりました。これもひとえに継続の賜物です。結局、一番難しいことは「継続」です。それ以上ことはありません。その点、私は執念深かったのか(笑)。それに「続く」ということは「その先に何かある」と直感が知っていたのでしょうか。学生だったころ「すごい才能があつて羨ましいな」と思った仲間の中にも続かなか



かった人もいれば、私のように半ばなりゆきで20年続いていた人もいます。結果的に続いたということは、創作の神様に「続けていなさい」と背中を押された結果なのでしょう。少なくとも私自身は、病気になっても、おばあちゃんになっても、プロの作家としての矜持を保ちながら続けるつもりです。…なんて偉そうに言っていますが、私は長らく自分の作品に自信が持てませんでした。こうして開き直れたのは最近です。もちろん時間をかけて、ひとつひとつの仕事に向き合い、足腰を鍛えてきたからこそ自信ですが、まさか20年もかかるとはね(笑)。一度きりの人生、やり直しはききません。人生の幕を閉じるまで続けられることを続ける。一生現役が目標です。



矢口加奈子(やくち・かなこ)

切り紙作家。1976年、千葉県生まれ。女子美術大学芸術学部に在籍していた1997年から「遊びのかたち」と題して創作活動をスタート。「切り紙」を軸として様々なかたちを発表してきた。多くの企業などに作品を提供することでグッズなども手がける。切り紙に関する著作も多数出版。活動の場を国内外で広げている。
<http://www.yorokobinokatachi.com/>





大村智名誉理事長 ノーベル生理学・医学賞受賞 文化勲章受章記念祝賀会を開催



大村智名誉理事長のノーベル生理学・医学賞受賞ならびに文化勲章受章を記念した祝賀会が5月28日にホテルニューオータニで開催されました。大村先生が会場に入場される際には、お祝いに集まった500余名の方々に大きな拍手で迎えられ、文化功労者で日本芸術

院会員の奥谷博先生や本学前学長の佐野ぬい先生からお祝いの言葉をいただきました。大学から女子美術大学名誉博士号授与と学校法人女子美術大学特別功労者表彰が行われた後、本学客員教授のイルカ先生からお祝いの歌が披露されるなど華やかな会となりました。

100年後に残る工藝のために 21世紀鷹峯フォーラム東京、開幕

日本工芸の再興に主眼を置きつつ、これからの工芸品のクオリティを高めるために新しい市場の創生を目的とした工芸の祭典、21世紀鷹峯フォーラム第2回 in 東京が開幕しました。2015年度に京都で開催された第1回大会の「京都提言」を引き継ぎ、日本一の消費都市・東京では「工芸を体感する100日間」というテーマで100機関を巻き込みながら100のイベントを開催。日本最大規模である工芸の祭典の主幹を、本学美術館(女子美アートミュージアム)が中核館として担当し、東京を代表する美術大学、そして都内の美術館、博物館、研究所等と共に期間中さまざまな事業を各所で展開します。工芸ファンをつくる普及啓発として工芸専門家が老舗や工房をアテンド、日本工芸を

世界に発信するために海外の文化背景や嗜好性を共有して工芸の新しい機軸を提案、今こそ取り組むべき素材・道具・伝承等の絶滅危惧問題を討議するなど、工芸のダボス会議とも言えるシンポジウムも予定しています。本学では工芸専攻の教育の根幹にある「伝統の継承」と「現代の創作」の特色、そして染織・刺繍・陶芸・ガラスの5つの素材を学ぶことができる教育内容とその実践を広く周知する展示を本学美術館と青山スパイラルガーデンで開催します。他にも360年の歴史がある小津和紙と協働したシンポジウムや特別展示、虎ノ門ヒルズでの若手作家展示により新たな鑑賞者を生み出す企画をプロデュースするなど、東京のいたるところで同時多発的に工芸の「見る」「学ぶ」「参加する」を発信しています。



21世紀鷹峯フォーラム 第2回 in 東京

2016年10月22日～2017年1月29日

サイト <http://takagamine.jp/>
問合せ ザ・クリエイション・オブ・ジャパン
03-3573-3339



「第29回東京国際ミネラルフェア特別展」開催

地球の大切な資源であるミネラル（鉱物・化石など）の魅力と、自然科学の素晴らしさを広く伝えると共に、学術・教育的資料の適正な流通を促進するため日本でも最初に始まったイベント「第29回東京国際ミネラルフェア特別展」で今回フェアに大学として初めて本学が展示をしました。芸術学部美術学科日本画専攻教授の橋本弘安先生が長年にわたり研究している岩絵具や鉱物顔料のサブミクロン粒子・ナノ粒子からの成果を、工芸専攻の染色、陶芸、さらにはプロダクトデザイン専攻と協力し発表。また、奇石博物館の協力で約5000

年前に噴火した富士山の天母山溶岩を釉薬として使用した陶芸作品を制作・展示し、工芸分野の新たな可能性を引き出しました。今回の出展にあたり、本学と共に先端的な粉碎機がある美術館のあかがねミュージアムも協力の。鉱物のラピスラズリを砕いて絵の具づくりを体験できるワークショップには多くの人が訪れ、粒子の粗さで異なる青い色を作り出していました。期間中には橋本先生の特別講演も行われ、連日大盛況でした。今後も最先端のテクノロジーを用いて研究を続けていくそうです。



新しい東京の空

「SKY CIRCUS（スカイサーカス）」オープン

「東京を、空からおもしろく。」をコンセプトに「見るだけの展望台」から「体感する展望台」へと進化を遂げた池袋・サンシャインシティ展望台は「SKY CIRCUS（スカイサーカス）」として4月21日にリニューアルオープンしました。さまざまな分野の大学が産学連携として開発に携わるなか、本学アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域の学生20名も開発に参加し、立方体万華鏡の第一人者でもある同領域教授のヤマザキミノリ先生の指導により60個のCUMOS立方体万華鏡や筒形万華



鏡を制作しました。これらの万華鏡は光と鏡の世界を目で見ても楽しむことができる「カレイドスケープ」エリアに設置され、覗いた世界をカメラで撮影して持ち帰ることができる話題に。キラキラと光り輝く世界で来場者を魅了しています。今回制作に参加した学生たちは、一般公開に先立ち開催された内覧会に参加し、初めて自分たちが作った万華鏡が設置されているエリアに足を踏み入れました。万華鏡をくるくる回して覗いたり、撮影したりと夢中になっている姿が見られました。



テキスタイルデザイナー界の先達 栗辻博を語る

5月25日、相模原キャンパスにて芸術学部デザイン・工芸学科工芸専攻主催のセミナー「テキスタイルデザイン界の先達 栗辻博を語る」が開催されました。講演は日本のインテリアデザインの黎明期であった1970年代に世界から認められたテキスタイルデザイナー栗辻氏について、作品制作のエピソード等、当時の様子を振り返りながら行われました。セミナーの企画は、本学客員教授の山本清先生が行い、司会進行を務められながら栗辻博氏の御夫人で人形作家の栗辻早重先生、ご長女で本学ウイジュアルデザイン専攻教授の栗辻美早先生、多摩美術大学教授高橋正先生、東京造形大学教授鈴木マサル先生の5名の先生方に、デザインの制作から教育までさまざまな角度から栗辻氏について語っていただきました。栗辻氏のテキスタイル作品は毎日の生活や経験から生まれ、時には旅行先のメキシコで食べたカット

フルーツでさえテキスタイルのデザインとなりました。芸術以外にも様々な分野に興味を持ち、涙もろく純粋な人物だからこそ日常の小さな出来事の素晴らしさに気付き、作品として表現することが出来たのだと語られる場面もありました。また、栗辻氏がテキスタイルの魅力について「例えば君が荒れた倉庫の様な空間にいたとする。そこがたとえ薄暗く、淀んだ空気の間所だったとしても、君がカバンからきれいなピンクの生地を取り出してそこに広げたら、その空間は一気にな変わってパーティーだって出来るかもしれない。テキスタイルにはそういう力があるんだよ。」と語られたとのエピソードもありました。栗辻氏に近くで接していた皆様方より、当時は思い浮かべながらお話をしていただき、聴講した学生には栗辻氏の人柄とテキスタイルデザインの魅力に浸ることのできる貴重な講演となりました。



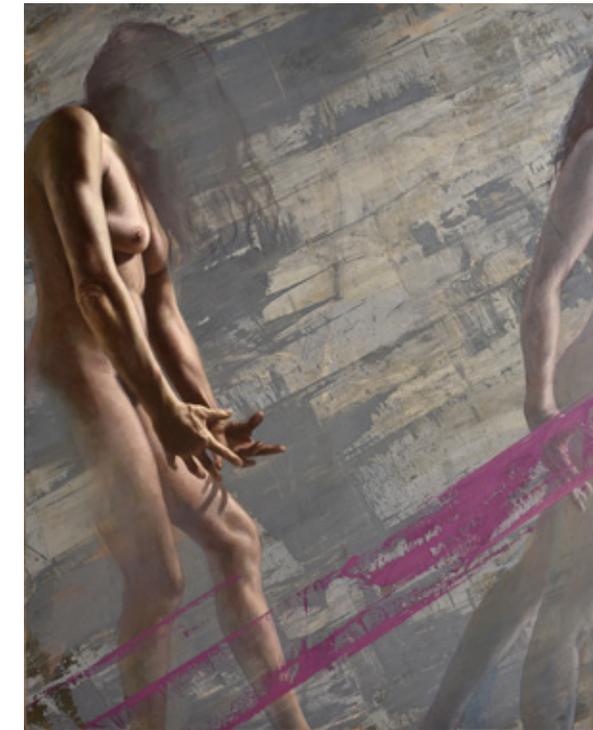
県立上矢部高等学校・県立白山高等学校と 教育連携に関する協定を締結

相模原キャンパスがある神奈川県では、2017年度より新たに「美術科」を設置する県立高校が2校誕生します。本学は既に出張授業などで連携をしていましたが、この度より一層の協力関係を築くために県立上矢部高等学校、県立白山高等学校と教育連携に関する協定を締結しました。これまで普通科専門コースとして美術科目に重点化した教育を行っていた両校ですが、今後は専門学科として「美術科」を設けることで、

更に専門的な美術・デザインを学ぶ環境が整うこととなります。横山学長は調印式後の会見で「将来に渡り幅広い協力関係を築いていきたい。高校と大学における『高大連携のモデルケース』になるように協力体制を強化していきたい」とコメント。美術に興味を持つ高校生の個性を伸ばせる教育環境が拡充することで、本学のみならず日本の美術・デザイン業界に寄与する人材を輩出することに繋がると期待しています。



① 高木 彩



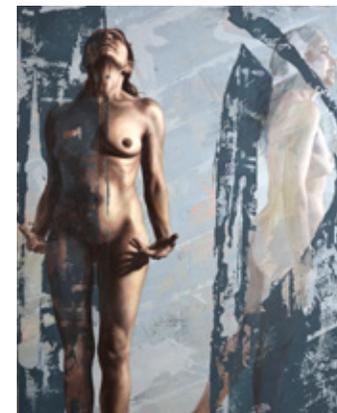
『Resilience』キャンバスに油彩 162×130cm



『漂流』キャンバスに油彩 130×162cm



パリ・デカルト大学での展示風景



『l'utopie ou la mort -コトビアか死か-』
キャンバスに油彩 162×130cm



高木 彩 (たかぎ あや)
洋画家。2002年女子美術大学大学院美術研究科修了。2005年「大村文子基金女子美パリ賞」受賞。文化庁の新進芸術家海外研修員として3年間パリ滞在後、ポーラ美術振興財団、野村財団在外派遣研修員として引き続きフランスを中心に活動を続ける。2011年より、パリデカルト大学後援のもと、ベネチア、パリ、フレンツェにて人体をテーマに展覧会を行う。

Q 1 なぜ海外で活動・仕事することを
選んだのですか？

きっかけは「大村文子基金 女子美パリ賞」を頂き、2005年にパリ国際芸術都市に滞在し、その後すぐ文化庁の新進芸術家海外研修員として引き続き3年間フランスに滞在した事です。こちらに残った理由は、顔料を始めとする良い画材が手に入りやすい。尊敬するアーティストに直接会い、作品に触れる事が出来る。制作のモチーフの一つである人物モデルが探しやすい…などです。

Q 2 女子美時代は、
どんな学生でしたか？

特に目立つ方ではなく、マイペースでのんびりと制作をしていました。大学も「皆勤」と言えるくらい休まず通い、朝から夕方までアトリエで描いていました。

Q 3 女子美時代の印象深い思い出を
教えてください。

大学で出会った友人グループで(女子美術からの子も含め10名以上)、各駅列車で東北や四国まで旅した事です。全員と今でも繋がっていて、お互いの作家活動を励まし合う友人も含め、かけがいのない存在です。

Q 4 美大の中でも、
女子美を選んだのはなぜですか？

女子美術大学付属高等学校を卒業した時点で、「日本中どこを探してもこんなに楽しい学校はないだろうな」と思っていたので、他の美大を受ける事は全く考えませんでした。「とにかく自分の本当に好きなものを見つける事、それが個性に繋がる」といった自由な校風と、設備の整った環境の中で、絵画はもちろん、短期講習で版画、彫刻、工芸、写真など色々な事に挑戦出来た経験が、すぐに実を結ばなくても、現在に至るまで精神的、技術的な面で自分の中に脈々と生きているのを感じます。

Q 5 制作・仕事をする上で
大切にしている考え方を教えてください。

新しい作品に向かう度、自分の内面の奥深い所に目を向け、浮ついた仕事をしない様に心がけています。

Q 6

大学時代にやっておくべきことについて、
アドバイスをお願いします。

先程「色々な事に挑戦出来た経験」とお答えさせて頂いたのですが、まだ挙げきれない程で「手漉きの紙を作る方法、油彩に限らずフレスコやテンペラ技法、立体…」と大学では様々な授業を(技法に限らず学科でも)受ける事が出来ます。「あの時、もっと細かい所までノートをとっておけば良かった…」と思う事も多々あり、せっかく貴重な機会を与えられているのだから、「これが将来絶対に自分の役に立つ」と自覚しながら取り組む事が大切だと思います。

Q 7

海外で制作・仕事をする事の
“楽しさ”を教えてください。

「様々な人との出会い」です。世界的に有名なアーティストでも、ギャラリーでのオープニングに行けば直接お話が出来たり、美術館での講演会に参加したりと、日本にいる時よりもぐっと距離が縮まります。パリ滞在最初の年に、日本にいる時から作品に魅かれていた、尊敬するアーティストに手紙を書いた所お返事を頂き、アトリエを尋ねて行った時の感動は今でも忘れられません。また自分の展覧会中に、見に来て下さる方の反応がより率直でとても刺激になります。絵の感想からその方の人生のお話に繋がる事もあり、「作品を通してまったく知らない人と繋がる事の出来る、アートの不思議な魅力」を知るきっかけになりました。

Q 8

やりたいことや夢を実現するための
ヒントを教えてください。

「手の届かないと思うもの、無理だと思う夢」があっても、恥ずかしながらに公言し、絶対に諦めない事だと思います。

Q 9

後輩(女子美生)に
一言メッセージをお願いします。

海外に出ても、現地の女子美の先輩後輩との繋がりに励まされる事が多々あります。いつでもどこで出会っても、世代が違って、すぐに打ち解け合えるのが女子美生です。何か壁にぶつかる事があった時「私は女子美出身なんだ」と思い出すと、「絶対に大丈夫だ!」と何か勇氣が湧いて来る「女子美パワー」があります。在学中はとにかく楽しんで、将来の夢を見つけてください!

Q 5

制作・仕事をする上で大切にしている考え方を教えてください。

技法の混在した作品が多いですが、共通しているのは、ディテールと小さな声、そして制作のプロセスをなにより大事にしています。また、応援してくれる方々や友人、チャンスを下さった恩師、「このおかげで私は存在している」というくらい深い影響を与えてくれたアーティスト、心から愛しているものへの『感謝と尊敬の気持ち』。これは生きる上でも制作する上でも、最大で無限のエナジーなので、とても大切です。

Q 6

大学時代にやっておくべきことについて、アドバイスをお願いします。

自分ひとりでいる時間と人と過ごす時間、情報と感覚(デジタルとアナログ)、両方のバランスをとりながら、好きな事をぜひ追求してください!

Q 7

海外で制作・仕事をする事の“楽しさ”を教えてください。

大変な事も多いですが、選んだのは自分なので、全部楽しむ事にしています。どうにもならない絶望の全底で、ふと真夜中に窓からみえた満月や、すばらしい作品、人のやさしさは、涙がでるほど美しいです。

Q 8

やりたいことや夢を実現するためのヒントを教えてください。

悩んだら手を動かし、人に会って対話し、リサーチし、ひとりになって考え、自分の心に照らし合わせて、また少し進む。だめだったときも、次の経験になったと考える。とにかく1mmずつでも進む。方向さえあっていれば必ずたどり着く、といつも念じています。

Q 9

後輩(女子美生)に一言メッセージをお願いします。

時間がかかったりするかもしれないけれど、自分でしかみつけれない・創れないもの、そのプロセスを楽しむ事を大事にして進んでいってください!



オスカー・ココシカとアルマ・マラーの人生に基づく現代オペラ『AMOK』の舞台美術の背景ビジュアルを担当。モノクロのドローイングは、照明によって様々な光の色が加えられ、登場人物たちの心の揺れや葛藤を表現。ランスのオペラ座、スイスのテアトルで上演された。(脚本・演出: Oriane Moretti、作曲: François Cattin、音楽監督: Nicolas Farine)
Photo © 2016 Stéphane Audran



新津亜土華 (にいづ あどか)

1998年芸術学科卒。メディアテクノロジーによって引き起こされる感情や、記憶と身体の在り方について多様な手法で制作発表する現代美術家。マテリアルと技術を組み合わせ、デジタル時代における複製イメージの新たな位置付けを行う。文化交流プロジェクトに企画・運営として多数参加。2015年より、パリ国立高等美術学校、講師(日本語による芸術交流プロジェクト担当)。
<http://www.adokaniitsu.com>



© 2016 Kiefer Conrad

② 新津亜土華

Q 1

なぜ海外で活動・仕事することを選んだのですか?

コミュニケーションとメディアの関係性についての制作を続けている中で、自分が前提としていることが、他の国ではどのように異なり、何が共通なのかということ、既成概念ではなく、実体験で気付きを重ねていかなければ、と感じていました。女子美パリ賞で初めて1年の海外生活を体験でき、その後再渡仏を決意しました。一人での制作が『観想の時間』だとすれば、たくさんの人々を行うプロジェクトは『自分がメディウムになるような活動』。歴史もあり文化の交差点のようなパリは、その両方を実現する拠点として最適な場所だと感じています。

Q 2

女子美時代は、どんな学生でしたか?

実は山梨の田舎から出て来たばかりの頃は、席が空いても勇気がなくて座れないくらい、引っ込み思案でした…毎日片道2時間半かけて相模原校舎に通っていたので、通勤ラッシュが本当に大変でした。

Q 3

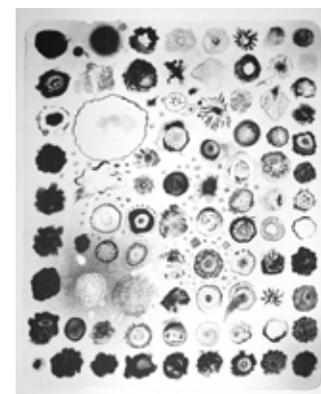
女子美時代の印象深い思い出を教えてください。

ウェブ制作のアルバイトのご縁で、女子美の先輩と同級生と一緒に『マッハ』というサイトを立ち上げ、“マッハガールズ”と名乗って作品を発表し、ネットアートの賞なども頂きました。どこの美大もまだオフィシャルサイトのほとんどないネット創世記に、ゼミの内山博子先生(現メディア表現領域教授)のご指導の下、企業と連携して女子美祭でネットカフェと速報レポートをやったり、まだ珍しかったネットオークションサイトを作って、女子美生のCG作品を販売、売上げを寄付したり、アメリカのコンピューター学会SIGGRAPHに参加したり…刺激的で最先端な現場を体験できたおかげで、行動力とコミュニケーション力が身に付きました。

Q 4

美大の中でも、女子美を選んだのはなぜですか?

アーティストになることを決意してから、ずっと考えていました。「芸術とはなんなのか、私には何が必要なのか?」と。絵も音楽も映像も興味がありましたが、当時の日本の美大には、まだ手法を領域に渡って学べる学科が少なく、女子美の芸術学科なら、芸術学から多様な表現技法まで、幅広く自由に学べるとわかり、高校生の夏休みに山梨から出て来て、都内の予備校の夏期講習に通っている間に、ある日一人で相模原校舎に見学にいきました。誰もいない夏休みの静かな女子美の校舎をただ外から眺めただけでしたが、近くにあった小さな石を拾って帰ってきました。あのときみた光景は今でもよく覚えています。



『Initial A (イニシャル・A)』
リトグラフ Arches 250g 57cm×76cm 2012年
パリ、フランス国立図書館収蔵



『Stone said (石は言った)』
リトグラフ 和紙、石灰石 10.5×11cm 2013年

20世紀を代表する巨匠たちが数多くの名作を生み出したムルロー工場の歴史を受け継ぎ、現在も世界中の現代美術家を魅了し続けるパリ・モンパルナスの石版画工房『IDEM』にて、大木基金助成により制作。

03 |

上海交通大学にて中国芸術を学ぶ

2016年4月に本学と学術交流協定を締結した中国の上海交通大学は、1896年創立で長い歴史をもつ大学のひとつであり世界的に高い評価を受けています。7月22日～8月5日、中国芸術の鑑賞方法と基礎知識を教授し、学生たちの視野を広げ創作アイデアを引き出すことを目的としたサマースクールが上海交通大学で開催され、女子美生13名と欧州で芸術を学ぶ学生14名が参加しました。期間中上海は39度を超える酷暑で



したが、学生たちは座学やフィールドワーク、案例分析やクリエイティブワークショップを通して中国現代芸術鑑賞や中国花鳥画技法などを学びました。また、本学芸術学部美術学科芸術文化専攻教授の坂田勝亮先生と同学科洋画専攻教授の福士朋子先生が招聘され講義を行うなど、参加学生にとって大変貴重で有意義な時間となりました。

04 |

美術監督・桑島十和子先生 特別講演

美術監督として活躍されながら本学短期大学の客員教授でもある桑島十和子先生の特別講演が杉並キャンパスで開催されました。これまで手掛けられた貴重な映画美術セットの画像やラフスケッチをスクリーンに映し出し、聴講している在学生からの質問に答えながら解説。桑島先生は「学生時代は人物や手を描くことが好きだった」「絵が描けなくても出来ることがある、やりたいことをやっていたから今の仕事につながっている」と学生時代を振り返りました。時折、冗談を交えながら裏方である現場の様子をお話いただき、「経験以上のことは生み出せない、今あるものを捻り出して昇華していく、だからいろんなことを見に行くことは大事」と在学生にエールを送りました。



01 |

オープンキャンパス特別講演 「萩尾望都先生への10の質問」を開催

芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域客員教授の萩尾望都先生による特別講演「萩尾望都先生への10の質問」が7月17日に杉並キャンパスにて開催されました。この特別講演は漫画家として活躍中の萩尾先生にお聞きしたい質問を事前にウェブサイトで開催し、その中から10項目にしばってお話いただくというもの。萩尾先生のアイデアの源や情報収集の仕方、これまでに発表された作品を描くに至った経緯など漫画家としての仕事に関するお話をはじめ、作品の登場人物やストーリーについてもたくさんお話いただきました。写真、映像、文学、さまざまなアートの形があるなか「漫画」という形で人々の心を動かし続けている萩尾先生。講演会終了後も来場者から多くの質問が寄せられ、会場は熱気に包まれていました。



02 |

第4回 「美術教育セミナー」開催

美術と教育、その双方に携わる方またはこれから志望する学生を対象とした講演会も今年で4回目になります。大学や高校はもちろん、小学校・中学校での教育の場から実践レポートを講演するなど大変貴重な場となっている美術教育セミナー。幼児期から高等教育までつづく表現や鑑賞、描いたりつくったりする創造活動によって培われる技能、それら「美術教育における連続性について」をテーマに活発な意見交換が行われました。

NEWS — & — TOPICS

Joshihi International Summer School 2016 Tokyo

日本の現代文化と伝統にふれる10日間

8月1日～10日、杉並キャンパスにて「女子美インターナショナル・サマースクール 2016 東京」を開催し、中国、フランス、スイスから8名の学生が参加しました。初日はキャンパスを見学し、女子美生の手掛けた作品を鑑賞したほか短期大学部の活版印刷工房で活版印刷を体験。ウェルカムパーティでは日本の伝統的なメニューを囲みながら参加者と女子美生が英語で会話を楽しむ姿がみられました。2日目からは授業がスタートし、アニメーションやキャラクターデザイン、漫画、刺繍、日本画、和紙のちぎり絵を講義と実技で学びました。また、学外ツアーでは美術館や博物館のほかアニメーション製作会社も訪問。製作現場の空気を肌で感じながらじっくりと見学してもらうことができ、日本の現代文化と伝統を深く知る10日間となりました。



「第16回広島国際アニメーションフェスティバル」開催

広島国際アニメーションフェスティバルは2年に1度、広島市で開催されている国際アニメーションフィルム協会公認の映画祭で、短編アニメーションのコンペティションや優秀作品の上映、体験型ワークショップ、セミナーや展示など会期中さまざまなイベントが行われます。16回目を迎えた今大会は8月18日～22日に開催され、アニメーション映像表現をカリキュラムに持つ大学や専門学校が全国各地から参加。本学も教育

現場の活性化と若い才能の発掘を目的とした「エデュケーショナル・フィルム・マーケット」にブースを出展し、卒業生や在学生の作品を上映しました。会場には本学アート・デザイン表現学科メディア表現領域教授の羽太謙一先生や同領域の学生たちも訪れ、世界各国から集結した作品をじっくり見てまわり、大いに刺激を受けていました。



松岡ハリス 佑子先生 特別講演

6月2日、杉並キャンパスにて芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域特別招聘教授の松岡ハリス佑子先生による特別講演が行われました。世界的ベストセラー「ハリー・ポッター」シリーズの日本語翻訳を手がけるなど国内外でご活躍中の松岡先生。シリーズの翻訳出版権を得てから編集・出版に至るまでの経緯や、各国の翻訳家の方々と国際会議を開催されたときのお話を通して、社会で信頼を得て仕事をするの大変さと尊さについて語りかけてくださいました。国際社会の第一線で活躍されている女性の先輩としての松岡先生の貴重なお話に、学生たちは真剣に耳を傾け、大きく頷いていました。

アジア児童コンテンツ・フェスティバル2016 女子美生の絵本を 紹介するブースを出展！

シンガポール図書開発評議会主催の「アジア児童コンテンツ・フェスティバル2016」が5月25日～29日にシンガポール国立図書館で開催されました。絵本やイラストに関するテーマを中心とした講演会やワークショップ、展示などで賑わう今大会に、本学アート・デザイン表現学科メディア表現領域とヒーリング表現領域では、学生の絵本作品を紹介するブースを出展。学生が装丁や紙にもこだわって制作した風合いのある美しい絵本や、タブレット端末で動きや音も楽しめるデジタル絵本を展示しました。開催期間中は現地の家族連れ、学生や教員、絵本出版関係者らが多く訪れ、女子美生の個性溢れる絵本を楽しみ、作品のクオリティの高さに驚かれていました。





13 | 相模原キャンパス 学生食堂リニューアル!

相模原キャンパス2号館1階にある学生食堂がお洒落な空間となってリニューアルしました。食堂スペースだけでなくカフェスペースも設置され、いつでも気軽に時間を問わず利用しやすい空間となっています。学生・教職員がアクティブに使い、常に活気溢れる場所になることを目指しデザインされたこの空間。人と人、人と作品が出会い、創作活動のモチベーションを高めるきっかけを作っていただければ、という思いが込められ食堂の新名称には「(電源の)スイッチ・切り替え・交換する。」という意味を込めて『SWITCH』と、命名されました。課題制作のアイデア出しや、PC作業、参考書を読んだり、友人と息抜きしたり、昼時以外にも自由な創作活動の場として利用してください。



12 | 女子美×東工大 ペリパトス・オープンギャラリー 作品リニューアル

本学大学院美術研究科と東京工業大学院総合理工学研究科は2013年に連携・協力に関する協定を締結し、その一環として設置された東京工業大学すずかけ台キャンパスの「ペリパトス・オープンギャラリー」が今年で4年目を迎えました。女子美術大学と東京工業大学、両大学の絆を深め、教育研究活動の一層の充実と質の向上、学術の発展と有為な人材の育成を目指すこのギャラリー。本学の卒業生と修了生の作品が展示され、屋内外でアートを身近に楽しむことができます。3月には作品のリニューアルとともに若手アーティストを奨励する学長賞や研究科長賞などが授与され、表彰式と懇親会では学生たちが作品に対する想いを語り合うなど有意義な時間となりました。

09 |

山崎直子先生特別講演 「宇宙の魅力と宇宙ファッション」を開催

宇宙の魅力とは。宇宙のファッションってどんなもの? オープンキャンパス最終日の7月18日、芸術学部アート・デザイン表現学科メディア表現領域客員教授で宇宙飛行士の山崎直子先生による特別講演が杉並キャンパスにて開催されました。講演会の前半は宇宙の魅力について山崎先生にお話をいただき、後半は同学科ファッションテキスタイル表現領域准教授の山村美紀先生、メディア表現領域教授の内山博子先生、そして電気通信大学准教授の野嶋琢也先生を交えたパネルトークが行われました。トークテーマである「宇宙ファッション」は、山崎先生にアドバイスをいただきながら両大学で研究を進めてきたもので、宇宙とファッションをつなぐ可能性について深く知る貴重な機会となりました。



新任教員からみなさんへ



あんじょう
安生 健一
芸術学部
アート・デザイン表現学科
メディア表現領域 特任教授

大学は自由に好きな勉強や創作をすることです。いろんなことに挑戦してみましょう。友達をたくさん作りましょう。一方で、自分が本当にやってみたいことをみつけるのは、実は一番難しいことかもしれません。それなら今度は試行錯誤を楽しみましょう。ときにがむしゃらに、ときに戦略的に。大学生活を愉快に楽しく過ごすことが皆さんの豊かな将来につながります。私もお手伝いします。

2000年オー・エル・エム・デジタル入社。研究開発部門を設立し、2016年5月より同社技術顧問。SIGGRAPH等の著名なCG国際会議・イベントにて、作品や技術の発表をしつつ、さまざまな審査員を歴任。



リンダ・デニス
芸術学部 准教授

We extend ourselves outward. Our experiences gather within. We and the world are forever changed. I am excited to be embarking on this new journey together with you.

私たちは自身を外界へと拡張させます。私たちの経験は内側に集積します。私たちと世界はともに不可逆的に変貌していくのです。あなたと共にこの新しい旅に出発するのはとても楽しみです。

1963年オーストラリア、ブリスベン生まれ。2010年東京藝術大学で博士号を取得。2014年タッチ・ベース・クリエイティブ・ネットワークを設立。2015年東京藝術大学グローバルアート共同カリキュラム 特任准教授、2016年三重県立美術館・柳原義達記念館と海の博物館で個展同時開催。



明德義塾中学・高等学校 吉田圭一校長(左)、
女子美術大学 横山勝樹学長(中央)、橋本弘安芸術学部長(右)

11 | 明德義塾中学・高等学校と 教育交流を推進する協定締結

6月23日、高知県の明德義塾中学・高等学校と教育交流を推進する協定を締結しました。明德義塾高校と言えば野球部の甲子園出場の常連校であることやゴルフの松山英樹プロの出身校であることなどスポーツのイメージもありますが、中学校でのオーストラリア留学をはじめとする教育の国際化に注力、これまでに世界13の国と地域からの留学生・帰国子女を受け入れていることでも有名です。本学と明德義塾中学・高等学校は、生徒さんたちの視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学の求める学生像及び教育内容への理解を深め、かつ高校教育・大学教育の活性化を図ることを目的とし、美術・デザインを通じた様々な教育交流を推進していきたいと考えています。



10 | 天才絵師の劇中画

花の名手・池坊専好が時の権力者である豊臣秀吉に刃ではなく“花”をもって仇討する姿を描いた小説「花いくさ」が2017年映画化されることとなり、その劇中絵画を本学卒業生の小松美羽さんが担当しています。豪華なキャストとなった俳優陣はもちろん、脚本や音楽、題字など制作スタッフも各界を代表する方々が集結し、世界に「日本の美」を発信する話題作です。小松さんは映画オリジナルヒロインの天才絵師「れん」が描く画を担当、これまでにない時代劇エンターテインメントで物語の重要な役割を担っています。

JAM

女子美の新星

4.7(木) - 5.22(日)

本学を卒業した20代の若手アーティストによる展覧会。様々なジャンルの作品を展示し、本学の多様な教育活動を示すとともに、卒業後の創作活動の軌跡を顕彰しました。

田原桂一 in JOSHIBI (光合成) プロジェクト「奥の細道」

8.4(木) - 8.7(日) 前期 8.21(日) - 9.11(日) 後期
※前期、後期とも内容は同じ

本展では、田原桂一が「奥の細道」に触発され制作した新作《俳句から想起した作品》のほか、《窓》《ボラロイド》シリーズを展示しました。田原桂一の呼びかけに応じて参加した学生の数は40名を超え、田原桂一と本学学生の競作をお楽しみいただきました。

女子美ギャラリーニケ

女子美術大学美術館 新収蔵作品展

4.8(金) - 6.15(水)

本学美術館で新たに収蔵された作品からセレクトして展示しました。

110周年記念ホール 特別記念展
大村智名誉理事長 ノーベル生理学・医学賞受賞記念
- 葦崎大村美術館収蔵作品展 -

9.9(金) - 10.8(土)

本展では大村智名誉理事長のノーベル賞受賞を記念して葦崎市立葦崎大村美術館、葦崎市ふるさと偉人資料館からお借りした貴重な資料を展示し、研究者としての足跡、本学における功績をご紹介します。

女子美術大学短期大学部 1年前期「基礎造形2016」展

7.8(金) - 8.3(水)

本学短期大学部1年生が自由選択授業で制作した18講座の作品を展示しました。

JAM

造形「さがみ風っ子展」

10.21(金) - 11.3(木・祝)

毎年恒例となった相模原市教育委員会主催による市立小中学生の作品を展示します。

学術交流協定校
ブレラ国立美術学院・女子美術大学交流作品展

11.9(水) - 12.2(金)

2014年に本学とブレラ国立美術学院が学術協定を締結したことを機会に開催する、両校の教員・優秀学生による作品交流展です。本展は日本での展示の後、イタリア(ミラノ)へと巡回します。

「創る・伝える・繋がる」
女子美術大学デザイン・工芸学科 工芸専攻教員展

12.7(水) - 12.21(水)

伝統工芸から現代美術までに及び、様々な素材や技法で表現された本学デザイン・工芸学科工芸専攻の教員作品を一同に展示します。
(工芸の祭典「21世紀鷹峯フォーラム」第二回 関連企画)

平成28年度 女子美術大学 退職教員記念展

1.6(金) - 2.2(木)

平成28年度に本学を定年退職される主に実技系教員による展覧会です。

女子美ギャラリーニケ

女子美スピリッツ2016 - 入江一子展 -

9.9(金) - 10.31(月) ※10月30日(日) 特別開廊

本学卒業生でシルクロードの画家・入江一子の百一賀記念展です。

六大学合同写真展 〇展

11.11(金) - 11.22(火)

女子美術大学・東京工芸大学・長岡造形大学・多摩美術大学・中国伝煤大学・東方設計学院の六つの大学でそれぞれ写真を学ぶ学生の写真作品展です。

平成28年度 女子美術大学 女子美術大学短期大学部
退職教員記念展

12.2(金) - 12.21(水)

平成28年度に本学を定年退職される実技系教員による展覧会です。

AP(アートプロデュース表現領域) 卒業制作展

1.13(金) - 1.25(水)

アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域4年生による卒業制作の展示です。

歴史資料展示室

平成27年度収蔵資料展
収蔵資料にみる女子美の歩み

5.13(金) - 3.12(日)

休室日: 火・日・祝日、12月27日~1月5日
※特別開室 10月30日、3月12日

収蔵資料展示を通じ女子美術大学115余年の歴史を紹介するとともに、一部コーナーにて大村智名誉理事長の幼少から現代に到る足跡を特別展示します。

(※ 9月9日~10月8日の期間 大村智名誉理事長関連の展示資料を110周年記念ホールに移設展示)



2016.6.11(土) - 7.24(日)

女子美染織コレクション展 Part6×渡辺家コレクション
「TEXTILE DESIGN 時代をうつす布」

女子美染織コレクション展Part6では、江戸時代から続く老舗に代々受け継がれた渡辺家コレクション*とのコラボレーションの展示を行いました。明治、大正、昭和と激動の時代をくりぬけてきたきものや帯、半襟など、時代とともに変容するテキスタイルデザインをご覧いただきました。当時の雰囲気より身近に感じていただくために一部着装という形を試み、きものの「形」としてみたデザインと、「衣服」として着装した状態でみえるデザインの二つの角度から、その魅力を紹介しました。関連イベントでは、本学客員教授の岡田宣世先生に渡辺家コレクションの受入れとその背景を魅力的にお話いただきました。また、女子美染織コレクションからは、江戸時代前期から後期までの小袖を展示いたしました。

*女子美術大学に寄贈いただいた2,000点にも及ぶ膨大なコレクションは、本学研究所が保管しています。



女子美術大学広報誌

発行 学校法人女子美術大学
〒166-8538
東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集 総務企画部広報グループ
監修担当 浅野正博・李谷吉也
デザイン協力 株式会社 Kitchen Sink.
印刷 株式会社 ヒーローズ
発行日 2016年10月21日
©2016 学校法人女子美術大学

広報グループでは女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせください。また、本誌の定期購読をご希望の方はお送り先を広報グループまでご連絡ください。

広報グループ | TEL 042-778-6123
E-mail prs@venus.joshi.ac.jp
URL <http://www.joshi.ac.jp>